

## 水俣市における地域開発の事例

北川 一美・皆嶋 円

### 1. はじめに

本稿は、2002年7月22～26日に熊本県水俣市で行われた地域調査実習の報告である。

同市での地域開発の実施例として、皆嶋が第2章 洗切市営住宅立替事業を、北川が第3章「日本一長い運動場線」(歩行者・自転車専用道路)を分担執筆した。これらは同市の取り組みの一部にすぎないが、これまでほとんど紹介されることがなかったため、成果や問題点などの提示として意味があるだろう。

### 2. 水俣市地域住宅計画における住民参加—洗切市営住宅建替事業におけるコミュニティ・アーキテクチャの実践—(皆嶋)

水俣市は、水俣病の解決と克服に向けて、県内外の幅広い人々を取り込んだ環境の再生・創造活動で知られる。そのうち、住まいづくり・住環境づくりにおいて、どのように地域住民を取り込んでいるのか、初の市営住宅建て替えを行った洗切団地を例として、居住者と周辺住民の双方から調べた。

#### 2.1 水俣市地域住宅計画 (HOPE 計画)

HOPE 計画とは、旧建設省が1983年に提唱したもので、Housing with Proper Environment (地域固有の環境を具備した住まいづくり)の略称である。そこに込められている今後の日本住宅政策の「展望」は、①全国一律傾向にある住宅政策は、地域の文化・個性をより踏まえて計画されるべき、②私有財産である住宅が集って「まちなみ」が形成される一住宅を建設することの社会的責任を深く認識すべき、ということである。

HOPE 計画は、1983年度より実施され、「地域

の特性を踏まえた質の高い居住空間の整備；地域の発意と創意による住まいづくりの実施；地域住宅文化、地域住宅生産等にわたって広範な住宅政策の展開」(旧建設省住宅局 1988)を目標とし、市町村が計画策定者となる。その市町村は建設大臣(現国土交通大臣)が指定し、一市町村当たり250万円を限度として国から補助金が交付される。1986年度からは、1年間の計画策定の後に実施される具体的事業の手法を決定するために、「HOPE 計画推進事業」が創設された。これは、市町村(または市町村が適当と認める者)が行う住宅建設指針の作成や、住宅市街地形成の実施計画の作成、専門家研修・コンサルタント派遣などの事業に対し、国が新たに必要経費の4分の1以内、500万円を限度として補助するものである。

水俣市は、1988年3月に水俣市地域住宅計画(HOPE 計画)を策定し、「なごみともやいの住まいづくり」をスローガンに、その後3年間にわたって12事業を推進した。「なごみ」とは、水俣の住まい・環境・住み方が持つ人の精神を豊穡してくれる何かであり、水俣の住まいづくりを評価し、展望するためのキーワードである。また、「もやい」とは、船と船をつなぎあわせる舳とは別に、九州で独特に用いられる「二人以上のものが一緒に仕事をする」との意を表す(延藤 1990)。HOPE 計画としての水俣市住宅政策の基本指針は、「季節感あふれる歳時記のまちづくり」、「活力ある地域産業の基盤づくり」と定められ、表1に示すように各推進事業が位置付けられた。

本稿で事例として取り上げる洗切市営住宅建替事業は、3年間のHOPE 計画推進事業が終了した後に行われたものであり、推進事業に直接的には含まれない。しかし、市営住宅建替は「水俣HOPEの精神」を普及拡大していく契機であり、その最初の洗切団地建替事業は重要な役割を持っている。

表1 水俣市地域住宅政策の基本方針

指針	季節感あふれる歳時記のまちづくり	活力ある地域産業の基盤づくり	
目的	HOPE計画の普及・啓蒙	住宅関連産業担い手の育成	設計・建設技術の向上
事業内容	HOPE計画概要パンフレット・スライドの作成 「水俣の建築紹介」の編集・発行 シンポジウムの開催 住まい方拝見ツアーの実施 久木野市営住宅の建設(木造4戸) 牧ノ内市営住宅の再整備の検討 その他モデルプロジェクトの推進	「なごみともやいの住まいづくり研究会」の発足 HOPE計画先進地の視察及び研修会の実施 住宅関連事業所及び住宅関連地場産業材製品の基礎調査・カタログの作成	「こんな家に住みたいナー」提案公募(設計競技)の実施 市営住宅の設計競技の実施

出典：建設省住宅局住宅建設課監修 1988.『HOPE計画—地域に根ざした住まいづくり』

## 2.2 コミュニティ・アーキテクチャ

コミュニティ・アーキテクチャは、人によって「住民主体の建築・まちづくり」(塩崎 1996)、「住民参加による建設計画づくり」(藤本 1998)、あるいは「居住者参加型方式・参加の住まいづくり」(延藤 1998)と呼ばれる。日本語訳が定まっていないのは、それに対応する現実が日本において希薄であるからと考えられる。コミュニティ・アーキテクチャは、プランニング、ディベロップメント、技術支援など住宅建設のすべての過程を含み、単なる建築にとどまらない労働環境・公園・近隣住区・近隣支援などコミュニティ全体を対象とする。コミュニティ・アーキテクチャは「環境というものは、そこに住み、働き、遊ぶ人びとが、その創造や管理に実際にかかわるならばよりよいものになる」(塩崎 1996)を原理とし、1960年代のイギリスに発した住民の利益擁護運動や住民を支援する専門家の職能運動である。

洗切団地建替事業は、日本における先駆的なコミュニティ・アーキテクチャの実践例である。

## 2.3 洗切市営住宅建替事業における事例

1952～53年に建設された洗切団地(写真1)は、鉄筋コンクリートの中層住宅であり、木造が90%弱を占めていた当時の公営住宅建設には珍しく、先進的なデザインで衆目を集めたようである。しかし以後40年以上が経過し、居住者の高齢化、設備の老朽化(アンケート調査によると70%の居住者が「設備の改善が必要」と回答)、現代社会の都市型居住指向とのズレなど、住環境

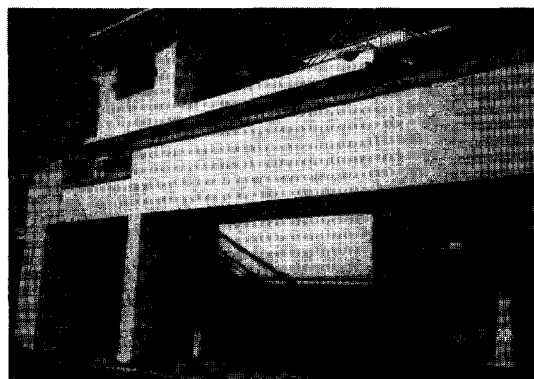


写真1 洗切市営住宅

の見直しが迫られた。そこで設計期間を1994年6月～1995年1月、工事期間を1996年3月～1997年3月として全面建替えが行われた。

### 2.3.1 立地条件と入居者情報

同団地は、水俣駅まで1.2kmと、市の中心部に位置しており、また団地から1km圏内に、市役所・図書館をはじめ公共施設があり、都市生活上の利便性が高いといえる。周辺は完全に市街化されているが、団地南側は蘆花公園に隣接しているなど生活環境が整っているといえる。

立地の良さに対する評価の高さからか、建替後も再入居者した例が27世帯中15世帯と多い。再入居者のうち高齢単身世帯が6世帯、高齢夫婦世帯が1世帯、障害者世帯が2世帯、大家族世帯が1世帯、一般世帯が5世帯という状況となった。再入居者の世帯構成は、全員が概ね65歳以上の世帯が53%、親と子供(長子18歳未満)が20%、

親と子供（長子18歳以上）が27%であった。

公営住宅建替事業においては、駐車場・駐輪場の設計計画はしばしば争点となる。洗切団地においては、再入居者の個別事情に対応した措置を取るべく、自動車（9台）、バイク（5台）、自転車（16台）の所有状況が調査された。

建替事業の最大の課題は「コミュニティの再現」である。建替事業では一般に、環境の変化についていけない長期継続居住者、特に高齢居住者がアイデンティティ・クライシスに陥ってしまう事例が多々見られる。そこでその地域の居住環境・近隣関係を築いてきた再入居予定者の意向を重視し、また全面建替事業（建物の規模・形態、広場・通路等オープンスペース、ゴミ置き場・集会所といった共同利用施設）が周辺住民に及ぼす影響が大きいことを考え、洗切団地建替計画では住民参加方式が取り入れられた。

### 2.3.2 住民参加の方法

住民参加を促すために3つの手法がとられた。第一に、再入居予定者へのアンケート調査、個別・グループヒアリング、研究集会が行われ、第二に、周辺住民（消防団、老人会、婦人会、区長、民生委員、行政協力員など）に対して個別ヒアリングが行われた。第三に、再入居予定者・周辺住民による合同研究集会が個別に計十数回開かれた。また、これら3つの手法を有機的に機能させるための研究集会が計4回開かれた。

### 2.3.3 住民参加により導き出された計画とその実現

以下では、住民参加により実現した特徴的な8つの設計を紹介する。

#### 1) 8タイプの住戸プラン

「間取りが比較的自由に換えられ、単身者はワンルーム感覚で使えた方がよい」という住民の要望と、洗切団地の立地条件、再入居者・新規入居者の特性から、一般世帯、単身者・高齢者世帯、身体者世帯、大家族向け世帯の4タイプの住戸プランが計画された。さらに、各戸の配置条件に応じて計8通りの間取りをタイプ化して設計が行われた。再入居者には、状況に応じ個別の間取りを実現した。

#### 2) A棟2重窓

周辺環境への配慮として「洗切団地周辺にある

歴史的建造物を訪れる観光客に対するもてなしの気持ちがあらわれ、かつ入居者のプライバシー保護されるように」という要望から、A棟には2重窓が設置された。A棟南面は、薫花公園と隣接している。この窓によって公園からの建物への視線を遮り、建築の美観を守り、また入居者の洗濯物をはじめとする生活をあからさまに見せずにすむことになる。

#### 3) ブリッジ

「隣同士でお茶のみできる雰囲気づくり」「団地内のコミュニケーションの活性化」が議論され、そのしかけの一つとして棟を連結するブリッジが設計された（写真2）。4階建ての建物では、棟が違えば上階の入居者同士は疎遠になりがちである。そこで各階の人々にまんべんなく通行の便宜を図るために3階ブリッジが設けられ、2階集会室への参集を容易にするために、2階ブリッジがA棟とB・C・D棟を結んでいる。

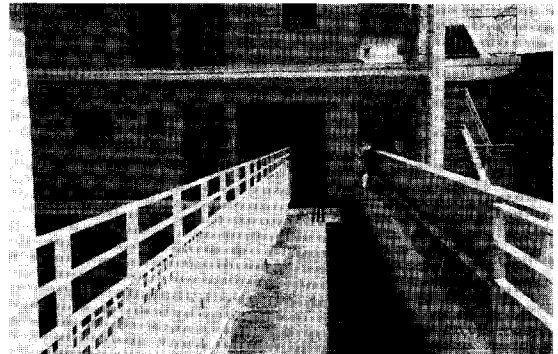


写真2 棟を連結するブリッジ

#### 4) 広い通路

様々な出会いを誘発するために玄関まわりに隣家との境界があいまいなスペースを設けることと

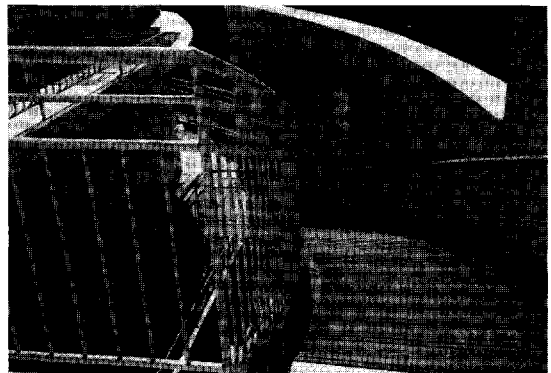


写真3 幅にゆとりのある階段

し、通路という空間をなごみの場所としてとらえた。エレベーターは家賃・共益費の負担増になることから設置が断念され、代わりに通路・階段がゆとりをもって設計された(写真3)。洗切団地の通路は、各所でふくらみやたまり場となるスペースを用意しており、プランター棚やベンチが設置されている。

#### 5) 通路のプランター棚

「ゆったりとしたテラスで緑を育てたり、テーブルを置いたりできるような半屋外の生活を楽しめる家」, 「戸外の緑を楽しめるオープンスペースを狭い敷地の中で多彩に用意する」という課題のもと、広い通路の各所にプランターが置けるように木製のプランターカバーがあり(写真4)、手すりにも工夫を加えている。プランターカバーは周辺住民にも日に止まりやすい所を選んで設置されており、屋上菜園同様、団地内外の人々にとって身近な自然となるように計画されている。



写真4 通路に並べられた植木鉢

#### 6) 屋上施設 (B棟屋上菜園・トランクルーム付A棟屋上)

「まわりに緑があると、自然と外に出て行くようになる」, 「花や野菜を育てることを楽しみにしている」, 「新しく入居した人と話す機会がない」という要望に対して、上階の入居者も自然に親しめるように、B棟屋上菜園が集会室の上階にある。また、トランクルーム付A棟屋上は、季節の出し入れをしたり、広場で修理、手入れ、虫干し等するときに、人々の交流を活性化することが期待されている。

#### 7) 集会室

「団地近くにある公民館を活用すれば十分である」, 「団地専用の集会室があると逆に団地だけで

小さくまとまってしまう」という集会室を不要とする意見がある一方、「これまで団地入居者全員が顔をそろえる機会がなかったのは、気軽に利用できる場がなかったためであり、集会室は必要」, 「集会室のような集まれる場所づくりは必要。そこで一緒に食べたり、知っている人に踊りを教えてもらったり、そこに近所の人もやってくるようになればいい」との意見もあった。第2回ワークショップにおいて、区長から、公民館全体が建替えの時期を迎えていること、現在奥まった位置にあることから、利便性の高い団地内に公民館をあわせて建設する要望が出され、皆の同意を得た。集会室には、炊き出しや餅つきのできる厨房つきの土間空間と車椅子トイレが併設され、集会室の一室は、団地訪問客用の臨時的宿泊所としても使えるよう設計された。

#### 8) 窓の内側に障子設置

冷房なしでも住めるような風通しのよい家—「今の建物は北から南へ風がよく抜けるようになっているので同じ方向に建ててほしい」, 「最上階に住んでいるが、夏は押し入れが熱を持ってしまい、夜2~3時までふとんが熱くて眠れない」, 「西陽対策を検討してほしい」という要望に対し、間取りの工夫、引戸の多用、格子窓・網戸・欄間の設置、納戸の設置(夏場など襖や障子を取り外して続き間のように利用できるよう建具を収納する)といった一般的設計に加え、居室の主な開口部に全て障子を取りつけた。障子は日にやさしく、優れた吸湿・断熱機能を持つにもかかわらず、利用が減少しつつある。また、建替前の洗切団地に障子があったことを再評価する意味も込められた。

#### 2.4 現状と課題

私は、建替事業が完了してからおよそ4年半経過した2002年7月に、この団地を訪れた。時期を外したためか屋上菜園には何も植えられていなかったり、A棟屋上のトランクルームが多少老朽化しあまり利用されていないようであったが、集会室に前々日までの祭りの跡が見られたりと、団地全体としては共有部分が機能し管理が行き届いていると感じた。案内者の水俣市都市政策課の方は、最上階居室の天井の一部が剥げかけ、修繕が必要であるとも語った。課員の方と住民の方の様子を見るにつけ、相互の意思疎通が凶れ居住状況に関する情報を頻繁に交換している関係であることを

実感した。計画の過程で、住民と行政が顔を合わせ、交渉する場を多く持ち信頼関係を築いた結果であろう。

洗切団地建替事業計画において住民参加方式が機能した要因は、3つ挙げられる。第一に地元の建設業者を利用したこと、第二に水俣HOPE計画推進事業に引き続き、「まちづくりの伝導師」として名高い千葉大学教授・延藤安弘氏がイニシアチブを取ったこと、第三に27世帯という小さな団地規模が住民参加を容易にしていたことである。なお、参加型建替事業計画に携わった団地居住者以外のは大半は、表1に記した水俣HOPE計画推進事業の関係者である。「住民主体の建築・まちづくり」といっても、現状は一部の水俣市住民に限定されてしまうようである。延藤氏が市に提示したように、コーディネーターの育成や参加住民層の拡大が、コミュニティ・アーキテクチャにとってのこれからの課題といえよう。

## 2.5 おわりに

「HOPE計画がなければ住民参加の意識も沸かなかった」というある洗切団地居住者の一言が非常に印象的であった。参加型方式が参加者自身の意識に及ぼす効果は多大であると思う。住環境に対する要望が吸い上げられ、具体的な形になるということは、住民に満足感を与える。自分自身の家や近隣地区の環境を創造することは居住者に大きな自信を与え、環境を誇りにすることにつながると私は考える。

## 謝辞

事前調査に快くインタビューに応じて下さった千葉大学の延藤教授、現地調査および文献調査に多大なご協力を頂いた、水俣市役所の石出さん・吉本さん、萩嶺一級建築事務所の萩嶺さん、洗切団地の松下さん、他水俣市の皆さんに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 文献

延藤安弘 1990.『まちづくり読本—こんな町に住みたいナ』晶文社。  
内田勝一・平山洋介 1996.『講座現代居住5 世界の居住運動』東京大学出版会。

建築思潮研究所編 1998.『建設設計資料65 公共住宅建て替え』建築資料研究社。

塩崎賢明 1996.特集：参加型プロジェクトの満足度. 日経アーキテクチャ: 65-70

建設省住宅局住宅建設課監修1988.『HOPE計画—地域に根ざした住まいづくり』日本経済新聞社。

高木富士川計画事務所 1995.『洗切団地建替事業設計説明書』

水俣市 1993.『水俣市住宅住宅再生マスタープラン策定業務概要版』

水俣市 1988.『なごみともやいの住まいづくり』

## 3. 山野線の跡地利用としての自転車・歩行者専用道路：「日本一長い運動場線」(北川)

### 3.1 「日本一長い運動場線」

かつて、熊本県水俣市と鹿児島県北薩地方は、日本国有鉄道(現九州旅客鉄道)山野線で結ばれていた。同線は車社会の進展や過疎化<sup>1)</sup>の影響を受け、1988年1月31日で廃止されたが、その跡地は関係自治体によって様々に利用されている。水俣市の歩行者・自転車専用道路「日本一長い運動場線」(通称「日本一長い運動場」)はその一例である。これは、水俣市山手町の新地踏切(水俣駅から約400m)から久木野大川の久木野踏切跡までの総延長13.08km、幅4mの市道<sup>2)</sup>である(写真5)。新地踏切は鹿児島本線の踏切として現存する。また大川踏切跡から約750m離れた久木野駅跡には久木野ふるさとセンター愛林館が建設された。

「日本一長い運動場線」は、放置された鉄道の跡地を抱える自治体や周辺住民に示唆する点があ



写真5 久木野側入口

ると期待できる。本稿では、一度はその役割を失った土地がどのように「日本一長い運動場線」として新しく生まれ変わったのか、また現状はどのようになっているのかを整理する。

なお、以下で注を付した部分は文献資料に基づくが、それ以外は筆者が行った聞き取りと現地観察による。

### 3.2 山野線概要

山野線は、水俣（熊本県水俣市）－栗野（鹿児島県始良郡）間を結ぶ、営業距離55.7kmの鉄路であった。大正末期からの強い新設運動を受け、1934年に水俣－久木野間が、1937年に全線が開通した（水俣市1991）。しかし1964年に赤字線に転落し、1984年に旧国鉄の第二次廃止対象線に

選定された。1986年12月にバスへの転換が決定され、1988年1月31日で全線が廃止された<sup>3)</sup>。

水俣市内には、水俣、東水俣、肥後深川、深渡瀬、久木野の5駅があり（図1）、水俣駅から約2km間は鹿児島本線と並走していた（写真6）。同線には長いループがあり、久木野駅は標高240mの山間地に立地する<sup>4)</sup>という特殊事情を抱えていた。廃線後、それらの駅跡地や線路跡地は市に買収され、活用が図られることになった<sup>5)</sup>。

### 3.3 「日本一長い運動場線」ができるまで

廃線後の線路跡地利用については、隣接する住民に売却するか、市が買いとるという選択肢があった。町内や市役所で検討会がもたれたが、問題は、それだけの長さの道路はなかなか新設できないが車道を設けるだけの幅がないことだった。そこで、市が買い取り、歩行者と自転車専用の道路をつくって人々の健康づくりに貢献することが考え出された。そこには、（車ではなく）人をつなぐ道路、という意味も込められていた。ところが、線路跡地を自転車専用道路に転用することは稀ではなく、九州内にも13kmを越える道路が既に存在した。そこで、覚えられやすく、健康づくりのために利用されるよう、「日本一長い運動場線」という名前がつけられることになった。

買いとられた土地は総延長約17kmあるが<sup>6)</sup>、価格は時価の1/10程度とされ、山林では1坪100



写真6 並走する鹿児島本線（特急つばめ）

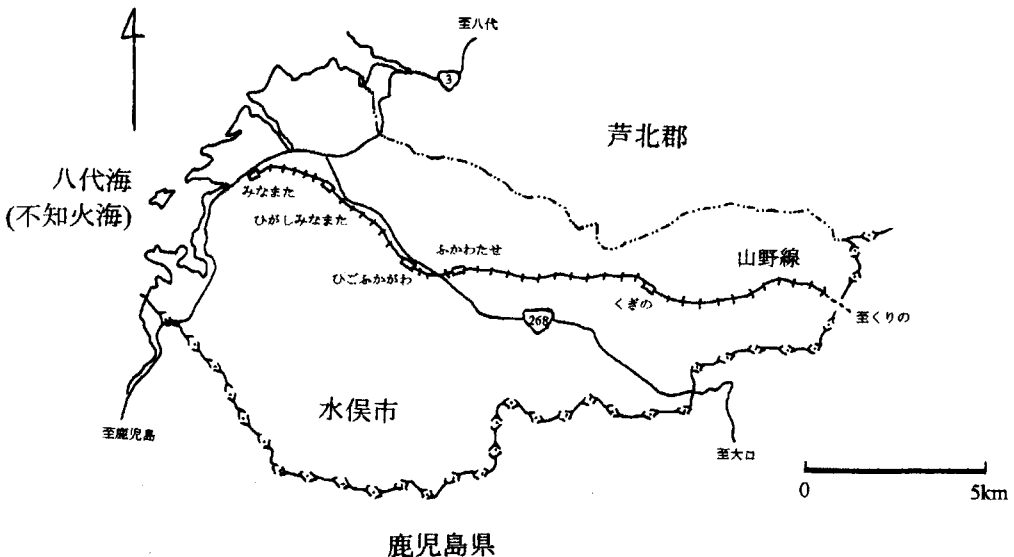


図1 山野線の位置（水俣市内）

円(板橋 1996)の土地もあった。工事は1990年から1995年3月までの5年間にわたり、水俣駅側から進められた<sup>7)</sup>。約6億円の財源には、転換交付金や県からの補助金などがあてられた<sup>8)</sup>。道路建設に伴って、トイレや水飲み場の設置、起点(水俣駅側)から東水俣駅跡付近まで市職員や退職者による桜の植樹<sup>9)</sup>なども行われた。1996年には、起点から1kmおきの里程表示板が水俣ライオンズクラブから寄贈された。「日本一長い運動場線」は、1997年4月に市道として認定され、供用が開始された。

### 3.4 住民と「日本一長い運動場線」

「日本一長い運動場線」は沿道の中学・高校への通学に使われているほか、朝夕に散歩をする人も多く見られる。散歩中の人々によれば、毎日5～8kmほど歩いているようで、皆が口をそろえて「健康にいい」「ストレス解消になる」と答えた。また、ここが以前は線路であったことは市によって広報されていないために、中学・高校生の中にはそれを知らずに利用している人もいた。鹿児島本線との並走区間では、鹿児島本線のフェンスに布団が干されたり、秋には稲がかけられたりするなど、住民の生活が映し出される一面もある(写真7)。

道には「健康づくり」をアピールした看板が所々に立てられているほか、起点-東水俣駅跡間には、道路わきにストリート・アスレチックと称した器具が置かれたところがある。さらに、夜間の通行を考慮し、起点から5km付近までは街灯が設置されている。両側に木が生い茂り昼間でも薄暗いところもあるが、これまでに大きな事故やトラブルは起きていない。

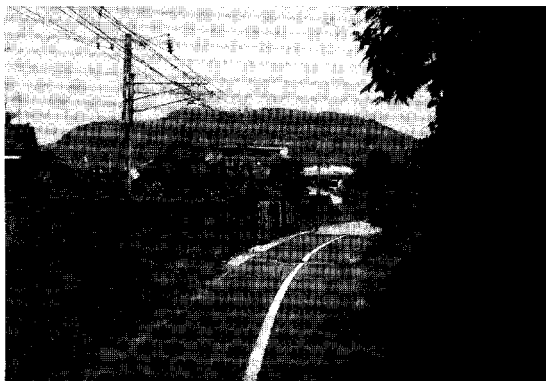


写真7 住民に利用される鹿児島本線との境界フェンス

人々の交流の場としては、高校のクラブ活動やマラソン大会、PTAの親子マラソン大会、愛林館の「ししなべマラソン大会」(2月)などに利用されている。しかし、例年12月に行われてきた自転車ロードレースは、車道と交差する地点があり危険なため、エコパーク水俣<sup>10)</sup>に会場が移った。その他のレースも警備がしやすいそちらへ移りつつある。

通常の整備は、市が行う年2回くらいの草刈りのほかは、住民に任されている部分が多い。市から草刈りに出向くのは、苦情が産業建設部土木課に入ったときで、それ以外は付近の住民に頼っている。久木野地区では、盆前に住民が揃って草刈りをすることがあるというが、普段は草は生え放題というのが現実だという。しかし、市街地から離れるにつれ農地と接するところが増え、農作業の延長としてボランティアで整備されているところも見られる。なお、市は、維持費として土木課の道路管理費の一部をあてている。

### 3.5 観光客と「日本一長い運動場線」

「日本一長い運動場線」は、水俣市が作成した観光ガイドマップやパンフレットのほか、熊本県芦北地域振興局のウェブページ上の水俣市観光・施設情報でも紹介されている。そこで強調されているのは、自動車が進入禁止なので安全であること、美しい山や川の風景を眺められることなどである。実際、入口付近には逆U字型の鉄パイプが埋め込まれ、自動車・バイクの侵入を防いでおり、脇を流れる水俣川や国見山地の山々、棚田の風景を楽しむことができる。

また、第3次水俣市総合計画(1996-2005)で示された「自転車のまちづくり」への取り組みの一つとして、1999年4月に市内7コース・5種類のサイクリング・マップが作成されている(図2)。さらに、水俣コンベンションセンターが管理するレンタサイクルが、水俣駅前ふれあい館、観光物産館まつぼっくり、愛林館の3ヶ所に計39台設置されており<sup>11)</sup>、観光客の利用促進を図っている。

なお、沿道には、トイレや水飲み場が設置され、水俣川沿いの立地を利用した川岸公園整備などはなされているものの、市のごみ減量化の方針により、ゴミ箱や飲料の自動販売機は一切置かれていない。

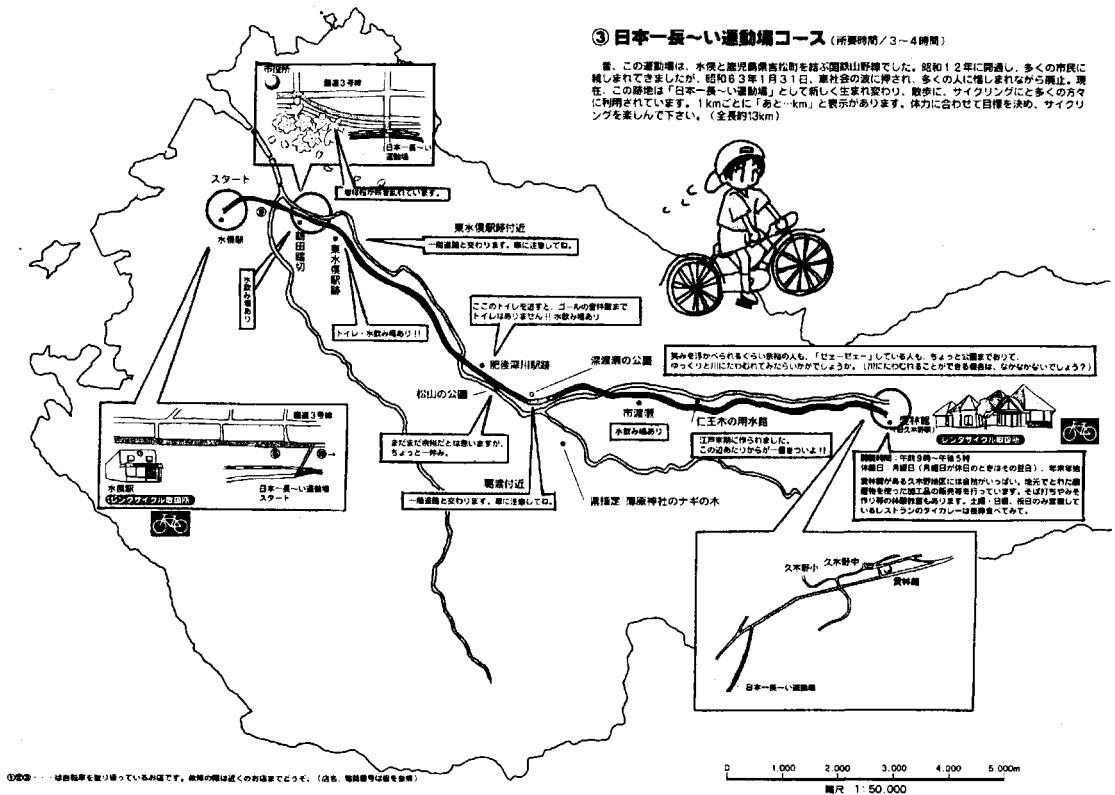


図2 「日本一長い運動場」紹介パンフレット

出典：「サイクリンるんマップみなまた」水俣市（自転車のみちづくり委員会）

### 3.6 問題点と将来への期待

最初の市の説明では、来る人すべてを対象として建設された道路ということだったが、利用状況からすると、現状は「沿線の市街地住民」と「沿線の学校の生徒」が主対象となっていると言える。肥後深川駅跡付近から久木野方面までは、日常で利用する人は非常に少ない。また、実際に現地を訪ねて感じたことは、市は観光地として紹介するほどの「観光資源」としては重視していないようである。それは例えば、山野線の面影を積極的に残そうとしていないことに現れている。住民のためにも、ストリート・アスレックス設備は長く伸びた草に隠れ、案内板は文字がほとんど消えてしまって根元で折れており、管理・配慮が行き届いていないことが伺え、現在の水俣市が目指す「自転車のまちづくり」、「元気づくり」、「まちとむらの交流」（水俣市 2001）などに生かされていない、との印象を受けてしまう。

とはいえ、水俣病センター相思社がその機関紙

『ごんずい』上で行った「水俣百選」の市民アンケートでは「日本一長い運動場」も選ばれており、自慢できる水俣の一つとして紹介されている。未整備の約4kmについても、意義ある利用法が考え出されることを願い、今後注目したい。

### 謝辞

調査でご協力いただいた、水俣市総務企画部企画課の水田利博氏、産業建設部商工観光課の研川英治氏、市観光案内所や愛林館、水俣市役所久木野支所の職員の皆さん、水俣市民の皆さんに、この場を借りて御礼申し上げます。

### 注

- 1) 「熊本日日新聞」1987年11月25日朝刊第3面によれば、山間地の久木野地区の人口はピーク時の半分に落ち込んでいる。



- 2) 道路構造令第39条によれば、自転車・歩行者専用道路の幅員は4m以上、とされている。当該道路の場合、線路の盛上部分を削ることにより幅の確保がなされた。しかし、側溝を入れるなどしたため、実際は必ずしも保たれているようにみえない。
- 3) 「熊本日日新聞」1988年2月1日朝刊第1面
- 4) 「運転作業要項 久木野駅 昭和62年4月 久木野駅長達1号」
- 5) 「熊本日日新聞」1987年11月25日朝刊第3面
- 6) 「日本一長い運動場」の総延長との間に差があるのは、久木野から鹿児島県側に約4kmの未整備の土地が残っているためである。今後の整備の目処は立っていない。
- 7) 踏切跡や、駅跡近くの車道に変更された（十分な幅が確保できたため）ところがあるため、途中で車道と交差するところがある。
- 8) 前掲注5
- 9) 市木である桜は、「1万本計画」によって、市有地への植樹が促進されている。
- 10) 水俣湾を埋め立ててつくられた、環境と健康をテーマにした緑地帯の公園。
- 11) 稼動状況は月平均50台程度。貸出料金は半日¥300、一日¥500で、どこで返却してもよい。

#### 文献

- 板橋雅弘 1996. 「日本一」を見に行く. DIME 1/1 1996: 53-56.
- 水俣市 1991. 『新水俣市史 下巻』水俣市.
- 水俣市 2001. 『第3次水俣市総合計画（後期基本計画）』水俣市.
- 水俣病センター相思社 2002. 特集 水俣百選. ごんずい 69: 2-19.

---

きたがわ かずみ  
 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻・地理環境学コース  
 みなしま まどか  
 同・生活政策学コース